



営農NEWS



抑制栽培キュウリやトマト、メロン、ナスにおいてハモグリバエ類の発生に注意しましょう

キュウリやメロンなどウリ科作物、トマトやナスなどナス科作物などでは、葉の中に潜った幼虫（ウジ）が線状に内部の葉肉組織を食害し、白っぽい絵模様になるハモグリバエ類（絵描き虫とも呼称される）被害の発生することがあります。

キュウリやトマトなどに寄生するハモグリバエ類の主要種は、トマトハモグリバエ、マメハモグリバエおよびナスハモグリバエなどですが、トマトハモグリバエはキュウリやメロンなどウリ科作物を好み、マメハモグリはトマトやナスなどナス科作物を好む特徴があり、また、ナスハモグリはトマトやメロンなどに寄生します。このうち近年は、トマトハモグリバエの発生が他の 2 種に比べて多くなっている傾向があります。

これらのハモグリバエ類はいずれも高温環境を好み、6～10 月にかけて多く発生しますが、施設栽培では周年を通して発生が見られます。幼虫による被害は、成熟した下位葉から始まり、作物の生育とともに上位葉に広がっていきます。幼虫期間は 3～4 日で、その後葉から脱出し、地上などで蛹になって 8～9 日後には成虫になります。

トマトハモグリバエやマメハモグリバエは、平成に入ってから相次いで海外から侵入してきた害虫で、既に各種薬剤に対して抵抗性を持つため難防除化しています。栽培中の作物における被害発生に注意し、多発生する前に有効薬剤で早めの防除を行ってください。

<防除のポイント>

- 1) 育苗中に寄生がみられた場合は、必ず薬剤防除を行ってから定植してください。
- 2) 施設栽培では、開口部に防虫ネットを展張し、成虫の飛来を防いでください。また、施設内に黄色粘着テープを設置して成虫の発生状況を観察し、防除の目安とします。
- 3) 圃場内外の多くの雑草に寄生しますので、常に除草に努めましょう。
- 4) ひとたび多発生すると、次々に蛹から成虫が羽化してきますので、薬剤の散布間隔を長く空けずに、集中して防除してください。
- 5) 多発生していた場合は、作後に土壌表面のビニール被覆、ハウス密閉による蒸しこみ処理を 2 週間以上行って、蛹等を出来るだけ死滅させます。
- 6) 薬剤散布にあたっては、株元から上位葉へ十分な薬量を丁寧に散布してください。

表 1 キュウリ、トマト、ミニトマト、メロン、ナスにおけるハモグリバエ類の主な防除薬剤（平成 27 年 8 月 3 日現在）

薬剤名	系統	対象作物					備考（処理法）
		キュウリ	トマト	ミニトマト	メロン	ナス	
プレバソフフロアブル5	ジアミド系	○●	○●	○●	○	○	散布、定植前の処理
アフーム乳剤	マクロライド系	●	◎	◎	○	◎	散布
コロマイト乳剤	マクロライド系	○	○	○	○	○	散布
アニキ乳剤	マクロライド系		○	○	○	○	散布
プレオフロアブル	その他	○	○	○	○	○	散布
スピノエース顆粒水和剤	スピノシン系	○	○	○	○		散布
ディアナSC	スピノシン系	○	○	○	○	○	散布
カスケード乳剤	I GR系	●	●◎	●◎	●	◎	散布
スタークル粒剤	ネオニコチノイド系	○	○	○	○	○	定植前の処理
ベストガード粒剤	ネオニコチノイド系		◎	◎			定植前の処理

注 1) 表中の○印は対象害虫がハモグリバエ類で、●はトマトハモグリバエで、◎はマメハモグリバエで農薬登録されています。

2) 各薬剤の各作物における使用方法については多様なため、薬剤ラベルの表記に従ってください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040